

岡崎市における公共交通利用促進イベントの効果に関する一考察

岡崎市役所企画政策部

平松 隆

岡崎市役所企画政策部

手嶋 俊明

名古屋産業大学 正会員

伊豆原浩二

名城大学 正会員

松本 幸正

1. はじめに

地域の生活交通となる路線バス等の利用者減少傾向が続いている。各地方自治体では、生活の足の確保を目的として、民営路線バス運行に対して補助を行ったり、地方自治体独自にコミュニティバスなどを運行したりすることが多く見られるようになってきている。そのような中、地域住民に対してバス交通を含めた地域公共交通の利用方法を見直してもらうべく、公共交通に関する各種のイベントが地方自治体によって行われるようになってきた。

そこで本研究では、公共交通利用促進を目指したイベントの効果をつめるため、平成 20 年 11 月に岡崎市で実施された「公共交通に親しむ日」の結果をまとめるとともに、その効果について考察する。

2. 岡崎市の「公共交通に親しむ日」の概要

愛知県岡崎市では、平成 20 年 11 月 1 日(土)と 2 日(日)の 2 日間、公共交通利用促進のイベント(岡崎市ではキャンペーンと表現)として、「公共交通に親しむ日」を開催した。案内チラシを図 1 に示す。

このイベントでは、主に以下の催しを開催した。

(1) 小学生以下バス無料の日

小学生以下の子供たちに対して、イベント当日の 2 日間、市内の路線バスと「まちバス」の全線の運賃を無料とした。岡崎市の小学校に通う児童には、岡崎市の学齢児童であることを証明する「わくわくカード」が配布されており、このカードの提示によって運賃を無料とした。なお「まちバス」は、市が運営する主に中心市街地を運行するコミュニティバスのことである。

(2) 無料シャトルバス運行

市中心部では、当日、市民祭りが開催されており、周辺にある 1 つの駐車場から市民祭りの会場まで、燃料電池バス、ハイブリッドバスを利用した無料シャトルバスを運行した。これらのバスによって、環境にやさしいバスのイメージを持ってもらうとともに



図 1 「公共交通に親しむ日」の案内チラシ

に、P&BR の利便性を体感してもらった。

(3) バスに関連する展示

市中心部の康生地区に位置するコミュニティサテライトオフィスにおいて、「あいエコモビリティライフ展」と「なつかしのバス写真展」を開催した。

その他のイベントとして、当日は、市民祭りが開催されるとともに、「ジャズストリート」などの催しも同時開催され、全市を挙げてのイベントとなった。また、このイベント日に合わせて、「図書館交流プラザ・リブラ」が開館するとともに、岡崎市内の拠点間を結ぶ快速バスや幹線バスの新規運行を含む路線バスの再編等も行った。

3. 結果の概要

イベント当日の路線バスおよび「まちバス」の小中学生利用者数を表 1 に示す。この数字自体からは、「小学生以下バス無料の日」による効果は測定できないが、少なくとも同数程度かそれ以上の大人の利用があったと見込める。表 2 は、路線バスの利用者数を示したもので、比較のため平成 20 年の 10 月における土日の利用者数も掲載してあるが、イベント当日は約 1.3 倍に利用者が増えていることがわかり、全市を挙げての各種のイベントによって、バス利用が促進されたことがわかる。

表1 小学生のバス利用者数

11月1日(土)	11月2日(日)
527人	251人

表2 バス路線の利用者数

	日程	利用者数
イベント時	11月1日(土)	17,187人
	11月2日(日)	13,693人
通常時	10月11日(土)	12,932人
	10月12日(日)	10,563人

この利用実績データの分析からは、バス利用者の増加が「公共交通に親しむ日」による効果か、市民祭りやジャズストリートなどの他のイベントによる効果か、あるいはバス路線再編による効果かは明確に区別することができない。しかしながら、バスの利用者を増加させるためには、バスのサービス水準の向上とともに、バスを利用するトリップの創出が欠かせないことを意味しているといえ、まちづくりと公共交通計画との連携の重要性が示唆されている。

4. 来場者に対する意識調査の結果

バス利用者の増加に対するイベント等の影響を見るため、イベント会場への来場者に対して実施したアンケート結果について考察する。アンケートでは、個人属性、来訪目的、利用交通手段とその選択理由、イベントの認知状況などについてきいた。得られた回答は、2日間の合計で634票であった。

図2は、来場交通手段を集計した結果である。この図から、多くの人がバスによって来場したことがわかり、バス利用者数の増加と合わせれば、本イベントの効果を示していると言える。鉄道とバスの利用者数は車の利用者数よりも多くなっており、通常の車の分担率の高さから考えれば、「公共交通に親しむ日」にふさわしい交通手段の分担率が実現したと思われる。

図3は、公共交通の選択理由を示したものであるが、「キャンペーンを行っているから」や「電車・バスに乗ってみたかった」の回答も見られ、今回のキャンペーンの効果と見ることができる。実際、「公共交通を親しむ日」を知っていると答えた回答者は全体の62%であり、本イベントの高い認知度によって、公共交通利用が促進されたと考えられる。

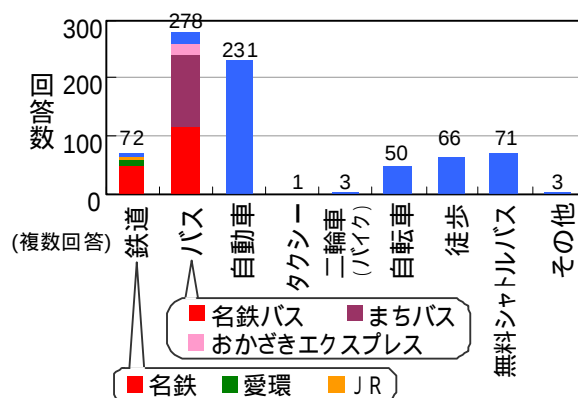


図2 来場交通手段

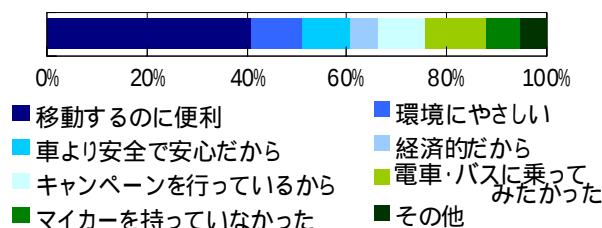


図3 公共交通の選択理由

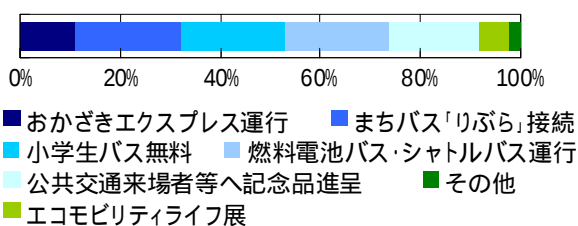


図4 「公共交通に親しむ日」で良かったこと

図4は、「公共交通に親しむ日」で良かったことを選んでもらった結果であるが、「まちバス「リブラ」接続」、「燃料電池バス・シャトルバス運行」に並んで、「小学生バス無料」が最上位に位置し、小学生運賃を無料にすることに対する効果を表している。

5. おわりに

本研究では、愛知県岡崎市で実施した「公共交通に親しむ日」の結果をまとめるとともに、その効果について考察した。その結果、これらのイベントは当日のバス利用者の増加に寄与したことが明らかとなった。特に、「小学生以下バス無料の日」の効果も表れており、さらなる施策展開の可能性について検討していく必要がある。これらのイベントによって市民の公共交通に対する認識は深まったと考えられるが、今後は、これらの認識の変化が実際の交通行動の変化にどのように結びついたかを検証していく必要がある。